

青少年委員だより

充電期間と言う名の良きバネにして 第158号



2年間を振り返って

江戸川区青少年委員会

会長 川島 英夫

新型コロナウイルス感染症が世界中に広がって2年が経過しました。生活様式は大きく変化し、私たち江戸川区青少年委員会も計画していた活動が思うようにならず、大変苦しい状況が続きました。

今期は令和2年4月に行われる予定の委嘱式が中止となり、それに伴い定例会等の会議も同年7月まで大半が中止となりました。その後は三密を避けながら、役員会、運営委員会をはじめ各種会議が開催できるようになりました。オンラインでの定例会も開催できました。しかし、再び緊急事態宣言が発出、全ての活動が制限されてしまい辛い経験の連続となりました。

令和3年の秋からは感染対策を徹底して対面式で定例会等の会議も再開することができるようになりました。

この2年間は心と身体のエネルギーを持て余した委員も多かったと思いますが、これを充電期間と言う名の良きバネにして来期に繋げていければと思っております。

そしてこの2年間、青少年委員会活動に携わってくださった皆様に心より感謝いたしますとともに、これからもご協力を賜りますようお願い申し上げます。

失ったものを数えるな

江戸川区立中学校校長会

会長 茅原直樹（二之江中学校校長）



平素より青少年委員の皆様には、区内各学校、園の教育活動に対し、温かいご支援を賜り、誠にありがとうございます。

さて、一旦は沈静化するかに見えた新型コロナウイルスの感染拡大は、新たな変異株の出現により増加傾向に転じ、再び感染爆発を起こす勢いで広がっています。

マスクに隠されてなかなか見られなくなった子どもたちの屈託のない笑顔。その笑顔を生み出すはずの人と人との交流の場もその多くが失われています。そのような中、昨年八月、江戸川区は、コロナ禍以前に行われていたジュニア訪問員事業を復活させました。区から貸与されたタブレットを活用し、中学生と熟年者がオンラインによる楽しい会話に花を咲かせたのです。タブレット操作の支援は区の職員の皆様が当たってくださいました。

私は、いつも生徒たちに「失ったものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ。」のパラリンピック精神で前向きに進もうと呼びかけて

います。この言葉を胸に青少年委員の皆様と各学校、行政の皆様が互いに持てる力と知恵を出し合っていけば、子どもたちは、本区の千葉教育長が以前おっしゃっていた「コロナ禍に子ども時代を送った世代は、思いやりがある。」と評価される大人に必ずや成長してくれるものと信じています。



12月定例会「区長さんとともに青少年委員会」



12月の定例会は「区長さんとともに青少年委員会」として、斉藤区長にご講演をさせていただきました。スライドを交えながら、現在の江戸川区の取り組みをご説明して頂きました。

学校教育については、放課後学習支援として学習塾の講師に依頼し、学習のお手伝いをしてもらっているとのことでした。これは、経済状況に関わらず、全ての子どもたちに平等に学習機会を与えたいという理念に基づいています。併せて、障がい児支援の強化として、重度の心身障がいや親亡き後への対策もしているとのことでした。

ご講演の中で印象的だったのは、区民70万人の内、外国人で登録されている方が3万5千人、つまり、20人に1人が外国人で、それが将来的に6人に1人の割合になると予想されています。そのような状況の中で、区長が目指す江戸川区の共生社会は、高齢者、子ども、障がい者、外国人などの「ごちゃまぜ社会」ということです。さらに、SDGsの取り組みとして、未来都市認定されたり、「ともに生きるまちを指す条例」を制定して「誰一人取り残さない」社会を目指すという区長の強い想いを感じました。

（文責 鹿骨地区部会 井上 功）

10月定例会「世界で感じた異文化とスポーツのあり方」

10月の定例会は、久しぶりに対面式での講演会を開催しました。

今年の東京オリンピッククフェンシング代表チームに同行したトレーニングコーチの西岡詩穂様の「世界で感じた異文化とスポーツのあり方」をテーマとした講演です。代表選手として世界各地を巡り、競技スポーツに対するメンタルの強さの必要性や、強豪国のお国柄など海外生活で感じた経験のお話でした。その中で、イタリア人コーチに指導を受けた時には、「日本の女子選手は可愛すぎる」と指摘され、試合では「感情を出す」メンタルトレーニングにも取り組んだそうです。世界で競う選手たちは技術だけでなく心も強く鍛えられていると、改めて印象付けられるお話でした。



後半では競技の剣やユニフォームなどの用具を全員に触らせていただき、順番待ちが長くなるほど皆が興味津々でした。基本フォームや動き方を教わった後、体験用の用具で試合体験を行いました。フェンシング体験は、子どもでも楽しく体験できそうです。今後日本のフェンシング選手の活躍を期待しています。

文責 小松川地区部会 林 義弘

11月定例会「3密を避けるレクリエーション体験」

11月の定例会は、わくわくレクリエーション研究グループによる「3密を避けるレクリエーション体験」で、糸電話とすきやきゲームを行いました。

糸電話は釣り糸、毛糸、たこ糸などの種類による伝わり方の違いや、大勢で繋いだ時にどのように聞こえるかを試しました。糸によって伝わり方が違ったり、人数を増やしても全員に伝わったり、糸がピンと張っていないと途端に聞こえなくなるなど、「もつとこうしたらどうだろう」をたくさん試しました。

すきやきゲームは、チーム対抗、じゃんけんですきやきの材料（カード）を勝ち取るというゲームです。全5種類の材料がなかなか揃わず、各チーム喜んだり残念がったりと大盛り上がり



でした。特別チャンスを作るなど工夫したいでいろいろな場面で見えるゲームでした。

レクリエーションの楽しさは、みんなで感情を共有したり一緒に考えることにあると感じました。また、その場を作る進行役は、場の空気を読み臨機応変に進めることが大切だと学びました。

文責 東部地区部会 塚原安希津

TOPICS オリンピック・パラリンピックのボランティア活動報告

活動を終えて

2021年5月から5ヶ月間に渡り、32日間、オリンピック・パラリンピックのボランティア活動に参加しました。ボランティアのチェックインや、活動日の調整といったボランティアをサポートする活動でした。

オリンピック期間は、旧ホテルオークラ別館で、パラリンピック期間は、選手村で活動しました。不安もありましたが、5年前から活動してきている企業からの出向者の方々の熱い思いも伝わってきました。今では開催できて本当に良かったと思っています。選手村では、聴覚障害の方々もたくさん活動していて、デフリンピックに向け、手を勉強しようと思っています。

常に改善点を見出しながらの活動でしたが、臨機応変に対応する経験が活かされたと思っています。

終わってしまえば、あつという間の5ヶ月間。貴重な経験と、素晴らしい人々との出会いの中で——
「私の真夏の冒険」
は、終わりを迎えました。



小松川地区部会 笠松 志保

子どもたちに伝えたい事

2021年夏 東京2020オリンピック・パラリンピック大会ボランティアに11日間参加してきました。

主な活動内容は、帰国後の選手の部屋の備品確認や選手村内にあるヴィレッジプラザ（選手のみ立ち入れるショッピングセンター）のIDチェックを行い、話題の段ボールベットを実際に見る事ができました。

また青少年委員の先輩委員から「手作り工作」で教えてもらった「ミラクルレインボーと風車」を持参してヴィレッジプラザ内で選手に手渡すおもてなしができました。

観戦ツアーに行けなかった児童に少しでも大会を身近に感じてもらいたいと思い、今回配布されたボランティアグッズを小学校に寄付をして大いに活用していただきました。

大会に参加できるのは選手関係者だけでなくボランティアとして参加する事ができます。

選手から感動をもらった子どもたちには、私たちボランティアが行った「今、自分ができる範囲で、おもてなしをする」の心を持った大人になって欲しいと思います。



松本小学校



鹿骨東小学校

鹿骨地区部会 渡邊 浩太郎

2年間のまとめ

おもしろ工作研究グループ

今期の研究グループ活動は新型コロナウイルス感染症の影響で活動場数が少なく、地域とのふれあいの場で新しい工作が披露できませんでした。

コロナ禍に対応した工作製作の議論もできず、とても残念な2年間でした。

まだまだ続く新型コロナウイルス感染症ですが、来期こそ今期できなかったことに挑戦したいと思います。



未来を担う人づくり研究グループ

私たち未来を担う人づくり研究グループの活動は、すすくスクールやなごみの家などに足を運び、子どもたちとふれあい、観察をすることで、子どもたちの安全で安心して過ごせる居場所の理想型を導き出していくことを目的としていました。しかし、今期におきましては、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から学校等の施設へ行けず、子どもたちの状況把握と分析などのグループ会議が多くなりました。あわせて、感染症の終息を願いつつ各委員のスキルアップに取り組んできました。



紙芝居文化研究グループ

新型コロナウイルスの中での2年間の活動となってしまいましたが、何が何だかわからなかった1年目を経て、2年目にはグループ員のみなさんのご協力の下、自宅で作業をしたり、短時間での活動をしながらなんとか新作の紙芝居を作り上げることができました。

この2年間の活動は、これからのさまざまなことに活かしていることと思います。



研究グループ活動

子どもの文化体験研究グループ

今期は葛西南地区を中心に、史跡や伝統文化、産業などを調査し、期の終わりの集大成とした「たんけん隊」で子どもたちに実体験してもらう予定でいましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で断念、その代案の旅番組のような映像を作成して各小学校に配布しようとしたのですが、これも実行不可能となりました。

来期は協力してくれた地域の方々のご支援に報いるためにも、再度、葛西南地区での活動を継続し、「葛西南たんけん隊」の実施を目指して活動していきたいと思えます。



わくわくレクリエーション研究グループ

2期目を迎えた「わくわくレクリエーション研究グループ」は、新型コロナウイルスの影響を受け、地域での活動ができませんでした。そんな中ではありましたが、ソーシャルディスタンスを保ちながら行えるレクリエーションを考えました。定例会では「大人数でつなげる糸電話」「密にならないすきやきゲーム」を体験しました。

今後も、子どもたちのために何ができるかを考え、引き続きスキルアップしていきたいと思っています。



SNSを使った情報発信研究グループ

今期の研究グループ活動は、途中で活動が休止になり、活動目標の変更を余儀なくされました。

最終的には、江戸川区の公式ホームページ内の「江戸川区青少年委員」を修正することに絞って話し合いを行いました。

まもなく、江戸川区青少年委員のホームページはリニューアルされる予定です。

来期は動画を使って青少年委員活動を紹介したいと考えています。どうぞ、新しい情報発信にご期待ください。



広報部2年間の活動に込めた想い

広報部長 中川 隆

今期の広報部会は、会議の3分の1が中止、会議時間は例年の半分でした。

その中で青少年委員だよりを4回発行できたことは評価できると思います。

読みやすい誌面作りについて話し合う機会が持てず残念でした。

次期への課題とします。

広報部会担当役員 大橋 一成

無から有を生み出す

まさに生みの苦しみ

写真を盛るアプリがあるようだが、無いイベントを盛り記事にするアプリが欲しかった。

広報部会担当役員 笠井雅世

活動できない日々は、自問自答の日々でした。これからは直接会えなくてもオンラインを活用したり、動画を作成してみたり、できることは、試してみる。来期はそんな活動に挑戦したいと思います。

小松川地区部会 林 義弘

活動が少なく記事にできるものが限られた今期でしたが、地域の皆さんに読んでもらえる誌面づくりは勉強になりました。活動記録の写真を2回担当しました。



中央地区部会 関 清孝

今期の広報部会は、記事集めに苦労した2年間でした。しかし、部長はじめ素晴らしいメンバーに恵まれたことが救いでした。

この間ご協力いただきました各委員に感謝申し上げます。

鹿骨地区部会 井上 功

コロナ禍で予定どおりのイベントや会合ができませんでしたが、いろいろとありがとうございました。

またご縁がございましたら、来期もよろしく願います。

東部地区部会 塚原安希津

人によって感じ方が違うからこそ、言葉や写真の選び方・伝え方に気を使いました。想いが伝わっていると幸いです。

葛西北地区部会 岡田はるな

なにぶんはじめてのことばかりで至らない点多々あったかと存じますが、中川部長を中心に、とにかく仲が良い広報部会となり皆様にあたたかくご指導ご鞭撻いただきました。つ取り組むことができました。

葛西南地区部会 山本祐子

コロナ禍で行事も少ない中で、メンバーの皆さん方のアイデアが勉強になりました。和気あいあいとした雰囲気良かったです。

あとがき

昨年は、夏に東京2020オリンピック・パラリンピックが無事に開催され、秋には青少年委員が集まって定例会を行うこともできました。しかし、年明けと共にオリンピックの影響を受けて青少年委員活動は中止となり、楽しんでいた野外研修もできなくなり、掲載内容を急遽変更しながらの発行でした。

コロナに始まりコロナで終わる、特別な期の広報部だったと思います。

青少年委員だより

発行 江戸川区青少年委員会
編集 広報部
連絡 江戸川区文化共育部

健全育成課育成活動支援係
☎ 03(5662)0357

